高知県立坂本龍馬記念館だより　2024（令和6）年4月　第129号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

龍馬（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

百代過客　HYAKUDAINO KAKAKU

「龍馬記念館の蔵出し ―学芸員セレクション―」展

博物館、資料館、記念館、はたまた美術館、科学館、文学館…名前も性格も多種多様ですが、これらはみな「資料（他の呼び方もあります）」を収集し、保管し、調査研究を行い、教育普及に努める施設です。当館もこうした施設のひとつ。今回の企画展は普段と少し違い、「高知県立坂本龍馬記念館」がどんな館であるかというのをご紹介する展示です。

日本史上、最も人気のある人物のひとりである坂本龍馬。昭和59年頃、高知県で商工会議所の若者たちを中心に、龍馬生誕150年を記念し、募金を集めて「記念館を建てよう」という動きが起こりました。多くの募金が集まり、当館が誕生したのは平成3年でした。それから20年以上が経過し、建物（現在の本館）が狭いうえ、日当たりが良く、あまり展示向きでなかったことや、NHK大河ドラマ「龍馬伝」の影響で多くの来館者を迎えたことなどが後押しとなり、平成28年に、本格的な展示・収蔵施設を備えた新館を新たに建てることができました。

博物館の土台を支えるのは、やはり「資料」の存在です。当館は当初、展示できる「資料」をあまり持たないままスタートし、年を追うごとに関係者が寄贈してくれたり、予算を立てて少しずつ買い集めることで資料を増やしてきました。当館では現在、約2,200点余りの資料を収蔵していますが、大きく分けて「寄贈」「寄託」「購入」「移管」という4つの手段で集めたものです。また、博物館にはどの館にも「資料の収集方針」があり、当館でもその方針に沿って資料を集めています。坂本龍馬に関わるものが主となりますが、彼が生きた幕末という時代、土佐という地域など、さまざまな視点から龍馬や周辺の人々、明治維新を理解するために必要な資料を集めています。こうした資料がなければ、博物館は展示を行うことも、研究や、講座などの普及活動を行うこともできません。

もう1点、博物館にとって重要な使命は、「今ある資料を少しでも良い状態で未来に残す」ことです。例えば、「日本をせんたくしたい」と書いた龍馬の手紙は、もらった乙女が捨てずに大切にし、乙女が亡くなった後も子孫の方々が守り続け、恩賜京都博物館（現・京都国立博物館）に寄贈されました。その後100年近くの間、博物館内で代々の学芸員が適切な管理を続けた結果、今私たちが目にすることができるのです。この中のどれが欠けても、龍馬の手紙は今見られるような状態で残っていなかったかもしれません。博物館にある資料は、今生きている私たちだけのものでなく、100年後、200年後の未来に生きる人たちのものでもあります。

本展では、各学芸員が所蔵資料のなかから「ぜひ見てもらいたい」と思う資料のいくつかをピックアップして展示するとともに、こうした博物館の裏側などもパネルで紹介します。

亀尾 美香

刀　銘「二十七代兼元」　当館建設のための募金活動が縁で、平成5年に関商工会議所青年部より寄贈

坂本直行画「早春の日高山脈」　北海道に移住した郷土坂本家の子孫で、画家としても活躍した坂本直行の作品

「錦絵にみる幕末維新」展

―絵師と庶民の徳川幕府―

振り返り

新たな世を目指して多くの武士が奔走した幕末維新期。坂本龍馬をはじめ、名の知れた武士たちが倒幕に努めた一方で、武家層ではない町人らもまた、この時代の構成員でした。これら庶民層は、瓦版などを手掛かりに揺れ動く世情を把握・理解しており、情報を知る媒体の一つには錦絵もありました。本企画展では、このような錦絵を中心に、絵師や庶民の立場からみた徳川幕府について紹介しました。

全32点の展示品の中でも、とりわけ多く取り扱った諷刺錦絵。特に戊辰戦争期の諷刺錦絵に焦点を当てて紹介し、絵師の精神と庶民の認識を読み解きました。

諷刺錦絵とは、批判的精神をもって人々に世情を伝える錦絵のことで、その祖は歌川国芳であると言われています。国芳は、符号や構図に工夫を凝らし、間接的に幕政批判に挑むことで、幕府からの嫌疑を回避するだけでなく、庶民間での議論を席巻させ、これにより諷刺錦絵が一躍人気となりました。

これを受け継ぎ、戊辰戦争期の風刺錦絵の細部にも、実に巧みな工夫が凝らされています。たとえば、各々の人物の衣服に描かれている家紋やシンボルマークからは、その人物が誰を表したものであるかが窺い知れます。徳川慶喜を表す人物の着物には、一橋の「橋」にちなんで「はしご模様」が描かれています。また、会津藩を表す人物には「あい吉」という名前が書き添えられるなど、絵師の遊び心が見られます。

制作者による痛烈な皮肉表現も、諷刺錦絵の魅力の一つです。「忠臣蔵九段めかけ合せりふ」では、当時庶民の間で流行していた『仮名手本忠臣蔵』のセリフである「へつらい武士」という表現が、彦根藩を表す人物の隣に書き添えられています。これは同藩の状況と重ね合わせたものであり、幕府側であった同藩が戊辰戦争開始後すぐに新政府側へ寝返ったことを風刺しています。

また、戦況が詳細に反映されているのも、注目すべき点と言えます。「浮世けいあんぐち」では、加賀藩を表す人物の隣に、「いつまで奉公お(を)してもつまらない、国へでもかい(帰)ろうか」と書き添えられております。これは、同藩の戊辰戦争に対する姿勢を正確に表しており、幕府側へ奉公をするのをやめて新政府側に寝返った事実を風刺したものです。

このように、諷刺錦絵には制作者の意思や当時の世相が如実に反映されていました。数々の諷刺錦絵から、将軍のお膝元に住まう彼らには、徳川政権に対する並々ならぬ想いがあったことが窺い知れます。そして、これを手に取った庶民は、その意図を把握し、理解に努めていたのです。

上村 香乃

浮世けいあんぐち

忠臣蔵九段めかけ合せりふ

龍馬館のお正月

新年がはじまって、あっという間にもう４月ですね。１月からはじまった「錦絵にみる幕末維新」展も、まもなく終了いたします。そんななか、今回は1月に開催したイベント「龍馬館のお正月」を振り返っていきます。元日は初日の出を見に来られる方で桂浜はにぎわっており、当館もたくさんの方にご来館いただきました。

今回の目玉は「お正月特別展示」です。龍馬が新年の挨拶を書いた木戸孝允宛の書簡や、縁起の良い「亀と寿」の描かれた掛軸（徳弘董斎画）、そして鮮やかな色づかいの掛軸「紫式部」と「清少納言」（どちらも河野棹舟画）を展示いたしました。

徳弘董斎と河野棹舟はどちらも高知県出身で、河野は主に大正期に活躍した日本画家で、徳弘は砲術家としても活躍した人物です。紫式部は、今年の大河ドラマ「光る君へ」の主人公でもあり、今年のお正月展示にふさわしい、華やかな作品です。どの作品も当館の収蔵品ですが展示の機会が少なく、好評のため１月中旬まで期間を延長して展示いたしました。

本館の「海のみえる・ぎゃらりい」は、昔懐かしいけん玉や福笑い、めんこ、りょうまカルタ、おみくじをご用意した、お正月遊びコーナーです。福笑いやかるたで遊べるように畳を準備し、さらにお正月らしい雰囲気で楽しんでいただきました。

おみくじは、「龍馬のてがみくじ」と題し、龍馬の手紙から抜粋した言葉をプリントしたオリジナルのしおりをプレゼント。今年一年、ふとした時に龍馬の言葉を思い出して、前向きな気持ちになったり、背中を押せるような言葉を選びました。

今年は辰年、龍馬の年ということで、新しい龍馬のイラストを、イラストレーターの村岡マサヒロさんに描いていただきました。村岡さんは高知新聞で連載中の漫画「きんこん土佐日記」の作者で、当館のホームページや館内にある龍馬のイラストを描いてくださっています。

今回描いていただいたのは、飛躍の年にするという願いもこめて、龍の背中に乗った龍馬が空を飛んでいるイラストです。お正月イベントでは、このイラストを使った缶バッジづくりも行い、子どもたちにとても人気でした。

今年も季節ごとのイベントを行っていく予定です。館内のアンケート用紙を通して、イベントの感想やご要望等もいただけますと幸いです。４月19日からは「龍馬記念館の蔵出し―学芸員セレクション―」展もはじまりますので、こちらも是非お楽しみに！

竹田 綾

動画コンテンツ紹介

坂本龍馬記念館では、こちらの飛騨だけでなく、SNSやYouTubeなどもつかって情報発信をしています。今回は、昨年より特に力を入れている動画コンテンツに関してご紹介いたします。

令和５年秋の企画展「龍馬の真髄」より、担当学芸員による展示解説をYouTubeで公開しています。こちらは、遠方にお住まいで来館がなかなか難しいお客様や、来館前に動画を見ていただくとより理解度が深まるのではないか、という思いから始めました。

撮影の仕方や資料の見せ方など試行錯誤しながらの取り組みのため、改善すべき点も多いのですが、展示とあわせて動画も是非お楽しみください。次回は、４月19日からの「龍馬記念館の蔵出し―学芸員セレクション―」展の展示解説を公開予定です。

錦絵展 ワンポイント解説動画

SNSはX（旧Twitter）、Instagram、Facebookでそれぞれ情報発信をしています。特にFacebookでは、当館の学芸員が順番にコラムを書いており、こちらのコラムはFacebookでしか読むことができません。龍馬に関することや、企画展のこと、当館の建物や季節にちなんだ周辺の様子など、テーマは様々です。コラムは２週間に１回ほどのペースで更新しておりますので、こちらもチェックしていただけますと幸いです。

坂本龍馬記念館
YouTube

SNSやYouTubeなどでWEBコンテンツが手軽に楽しめるようになり、日本全国や世界にむけて情報を届けられるようになりました。今後もこういったツールを活用して、坂本龍馬記念館をたくさんの方に知ってもらい、来館のきっかけになるように取り組んでまいります。

竹田 綾

ここは館長の部屋

吉村 大

令和5年度の事業期間が満了しました

令和5年度を振り返りますと上半期は、連続テレビ小説「らんまん」の放送や桂浜公園のリニューアルの勢いも生かそうと、これらと連動する『特別展「花と歴史の爛漫土佐」』を開催しました。この特別展では桂浜・浦戸湾エリアの歴史文化や坂本龍馬像の建立を探訪し同エリアの息吹を押し出しました。また同展の期間中には、所蔵者の高知県立歴史民俗資料館の協力を得て、坂本龍馬像のモデルとされた「坂本龍馬湿板写真」原板の特別公開も行いました。

下半期は、『企画展「龍馬の真髄」』でスタートしました。当館では令和４年度に龍馬真筆書簡７点を新たに収蔵しましたので、これまで収蔵していた真筆書簡７点との合計で14点の収蔵点数となりました。この企画展では、このうちの13点を展示するとともに、龍馬の考え方が明示された「海援隊約規」と「新政府綱領八策」の複製や、龍馬の愛した「佩刀（脇差）」などの展示を通して、龍馬の真の功績やパーソナリティを紹介し龍馬の真髄に迫りました。

令和5年度フィナーレの企画展は、「錦絵にみる幕末維新―絵師と庶民の徳川幕府―」です。江戸期の錦絵は、風景画や美人画などの娯楽品、事件を速報するメディア、さらには巧みなユーモアや技法を交えて幕末の世情を描く諷刺画として流行しました。本展では諷刺画をはじめ錦絵32点の魅力を通して、絵師と庶民独自の政治意識や徳川幕府観などを紹介しました。

令和5年度はこうした一連の企画展示事業を通じまして、多様な歴史の面白さや奥深さを切れ目なく発信いたしました。新年度の最初の企画展は、「龍馬記念館の蔵出し―学芸員セレクション―」展です。当館の収蔵品の中から学芸員がこだわりの一品を選んで展示する企画で、初公開の品々も含めますのでどうぞご期待ください。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会共催事業

特別展「花と歴史の爛漫土佐」
第2部「月と龍馬の桂浜―坂本龍馬銅像物語」
特別講座「『坂本龍馬 湿板写真』と幕末の写真技術」

三井 圭司氏（（公財）東京都歴史文化財団学芸員・アーツカウンシル東京企画係調整担当係長）

三浦 夏樹（当館学芸担当チーフ）

令和5年9月16日（土）19:00～20:30　於 高知県立美術館ホール

仏のダゲールが発明し、一八三九年に公開された「ダゲレオタイプ」が、最初の写真方式と言われている。銀鏡に画像を生成する技術で驚くほど高解像度でありながら、絵画同様、一回の制作で得られる画像は一枚のみである。

「写真」として後に一般化する光学像を定着する技術開発の試みはダゲールが起点ではなく、十八世紀末、英のウェッジウッドが幼児教育のために始めた研究が嚆矢だと考えられる。また、英のタルボットは撮影で紙製のネガ原板を作り、この原板で印画紙にプリントする「フォトジェニック・ドローイング」を編み出す。そして、これを発展させた「カロタイプ」を一八四一年に発表。この技術によって、世界初の写真集『The Pencil of Nature（自然の鉛筆）』を上梓した。

そして、英のアーチャーが一八五〇年にガラスを用いる「コロディオン湿板方式」を発表した。カロタイプのように印画紙にプリントすること、ダゲレオタイプのように撮影原板を鑑賞すること、この両方の使い方が可能な技術として活用され、一八八〇年代にゼラチン乾板へバトンを渡すまで、中心的写真技術として世界的に普及した。そして、これは日本も同様であり、坂本龍馬の写真もこの技術によって制作されている。

上野彦馬の父・俊之丞は一八四八年に初めて日本へ写真機材一式を輸入したが、この俊之丞は彦馬が十三歳の時に亡くなっている。この上野彦馬が開業する「上野彦馬撮影局」こそ、坂本龍馬が撮影されたスタジオである。

彦馬は舎密試験所へ入り、ここで写真と出会うのだが、この準備として名村八五右衛門にオランダ語を学んだ。この名村も日本の初期写真文化に関わりのある人物で、ペリー来航時にダゲレオタイプで撮られている。この写真はダゲレオタイプの特性として鏡像になった。そのため、名村は他の通詞にこれを伝え、以後撮影される人は着替えをし、刀を逆に差して矛盾が生じないようにした。江戸人にとって、鏡像即ち着物の合わせが逆になった姿を作ることは、看過できなかったからであろう。

舎密試験所に入った彦馬は、蘭の医師ポンペから写真を知り、津藩士の堀江鍬次郎とともに研究を進める。出島に滞在していたブルークで、後には写真家ロシエから技術を学んだ。ロシエとの出会いで機材の重要性を知った彦馬たちは、津藩主・藤堂高猷から約一五〇両を引き出し、出島商人ボードワンから機材を購入し、技術を確立させた。

その後、彦馬は津藩の有造館洋学所に講師として招かれ、日本初の科学の教科書『舎密局必携』三巻を出版する。巻三には「撮形術　ポトガラヒー」としてコロディオン湿板方式の詳細が記されている。彦馬は帰郷後、文久二年暮に自身のスタジオを長崎に開業し、ここで龍馬の写真が撮影された。なお、日本最初の写真家は、上野彦馬と下岡蓮杖のどちらかとよく聞かれるが、実はどちらでもなく、鵜飼玉川という人物である。

コロディオン湿板方式は、後の乾板やフィルムと違い、感度が低い。また、原板を作って撮影し、暗室で現像液に浸けるまでの間に乾いてしまうと像が現れない。そのため、撮影の際には、必ず傍らに暗室が必要となる。

龍馬が撮られた状況を考えるうえで、この特性は重要。感度が低いため、被写体となる人物も数秒間静止しなければならない。被写体にも相応の負担がかかるのである。また、誰が支出するかを別にしても、安価なものではない。何か特別な人生の節目で写したとも考えられうる。

龍馬の湿板写真は慶応二～三年頃に撮られたと言われ、材料が少ないこともあり深く追究することがなかった。しかし今回改めて「龍馬の脱藩が赦された時期が撮影時期に関係するのでは」という指摘があり、立位と同じ日に撮られたとされる座像や溝渕広之丞の写真、台紙に書かれた溝渕の従者・吉村正の覚書、時系列などを整理したが、やはり正確な時期の特定には至らなかった。しかし、後藤象二郎に会い、脱藩の罪を許された時（慶応三年一月）であれば辻褄は合う。あくまで可能性として提示するしかないが、今回の話で、少なくとも検証の新たな糸口が見つかったと言えるだろう。

企画展「龍馬の真髄 ― 龍馬は何者？ Who is Ryoma？ ―」

記念講演会

「手紙に込められた龍馬の真意を探る―深読みする楽しさ―」

宮川　禎一氏（京都国立博物館特任研究員）

令和5年11月4日（土）13時30分～15時　於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

坂本龍馬の歴史学的な研究評価は今も盛んであり、「凄い」とか「大した事ない」とか「捏造だ」とか評価はさまざまです。でも私も含めて現代人は誰も龍馬には会ったことは無いのです。

現代、坂本龍馬に会う方法はひとつだけです。残された一四〇通ほどの龍馬の手紙を丹念に読むことです。それは簡単そうに聞こえてなかなか難しいことです。ですから現代語に訳することに意味があります。現代人が書く多様な評判はさておいて、現存する手紙から彼の人間性を直接読むほうがよっぽど坂本龍馬という人に近づけます。坂本龍馬記念館で龍馬の話をするのはなかなか難しいのですが、私がこれは龍馬らしいと思う手紙をいくつか紹介します。あまり政治的な手紙は選んでいません。家族や知人にあてた手紙の中にこそ坂本龍馬という人は「今でも生きている」と思います。

手紙の中のキーワード

龍馬の手紙には大切なキーワードがいくつか見られます。

「四十歳」・・坂本家の後継者候補としての龍馬。兄から「四十歳になったら土佐へ帰ってこい」と言われていたからこその表現。龍馬の手紙に三回でてきます。

「この手紙は決して人には見せてはいけない」・・・重要な内容の手紙だという意味です。

「ハイハイ、エヘン」・・「ハイハイ」と二度言う人間は弟的です。話を半分だけ聞いています。

「はからずも」・・龍馬の手紙で多く見られる表現です。人生には予想外のことが起こるという考え。

「露の命ははかられず」・・人間（私）はいつまで生きるかなど分からない。人間の命ははかない。

「義理というもの」・・現代的な「義理」ではなく、正しい大義のような意味。対語に「情け」があります。

「人間というものは」・・とても哲学的。物事を抽象化する心性を持っています。内省的でもあります。

「なんの浮世は三文五厘」・・「この世はそんな安い値段だ。乙女姉さんも思い切って家出したらどうか」

「元亀天正の頃」・・この文久三（一八六三）年は戦国時代であり、実戦が練習だ。講談口調です。

以下では大切な手紙を三通紹介します。

1、文久三年三月二十日　乙女あて　京都国立博物館蔵

文久二（一八六二）年の三月末、龍馬は土佐を脱藩し、天下に活動の場をもとめました。この手紙はその一年後、文久三年の三月に土佐の姉乙女に初めて出した手紙です。実際、その間の手紙は現在残されていません。江戸で幕臣勝海舟の弟子となり、海軍の創設と修行という人生の目標をみつけた喜びが綴られています。その奔放な表現は龍馬ならではです。「四十歳までは家には帰らんつもり」と書いていますが、これは坂本家の後継者問題に関わる表現です。京都で再会した兄権平との話し合いでおそらく「お前が四十歳になったら土佐へ帰って坂本家を継げ。それが海軍修行を許可する条件だ」と兄から釘をさされたのでしょう。しかしながら、やがて次の川原塚茂太郎あての手紙に龍馬の本心が記されることになります。ようやく勝先生の弟子となったばかりで、まだ何の活躍もしていませんが「国のため天下のため力を尽くしております」と大言壮語しています。

2、文久三年八月十九日　川原塚茂太郎あて　東京・個人蔵

龍馬が実家坂本家の後継ぎの問題について記した手紙。龍馬は文久二年に土佐を脱藩し、実家との縁が切れたかのと思いきや、この手紙にはその後も続く家庭の問題があったことが記されています。川原塚茂太郎は兄権平の妻千野の弟で土佐勤王党員。龍馬の姪春猪の母方の叔父にあたります。龍馬に「広い世界を見よ」とアドバイスするような、よき相談相手であったことも文面から伝わってきます。この手紙を読むと、兄権平は弟の龍馬を坂本家の後継者候補と考えていたようです。文久三年二月頃、京都で再会した龍馬に兄の権平は「お前が四十歳になるまでは海軍の修行をしても良いが、そのあとは土佐へ帰って坂本家を継げ」と申し渡したらしいのです。兄の面前では一度は「ウン」とか肯定的な返事をしたらしい龍馬ですが、現状を見て、十年後まで自分の命があるだろうかと考え、自分ではなく、然るべき人物を坂本家の養子（春猪に婿養子）に迎えることを考えて欲しい、と春猪の後見人である茂太郎さんへ頼んだ手紙です。龍馬の本心が記されて貴重です。私の龍馬研究のきっかけにもなりました。

3、慶応二年十二月四日　坂本権平・家族一同あて　高知県立坂本龍馬記念館蔵

私が「大笑いの手紙」と呼ぶもの。近年、札幌で原本が見つかり、高知県に寄贈されました。慶応二年一月二十四日未明に伏見寺田屋で襲われて怪我をし、伏見の薩摩屋敷に収容され、二月一日には京都二本松の薩摩屋敷に護送された坂本龍馬です。そこで小松帯刀と西郷吉之助と寺田屋での遭難事件からの一連の経緯を総括して「かえりて幕府のあわてものにではいてはからぬ幸いなり」と三人で大笑いしています。その真意とは何か。そこに重大な歴史の機微があったと思います。龍馬が寺田屋で襲われて「幸い」なのはなぜなのか。この手紙に書かれた小松・西郷・坂本の「大笑い」とは何だったのか。

私の解釈は「薩摩藩が龍馬の身柄引き渡しを拒絶して伏見奉行所（幕府）と大モメしたこの事件のお蔭で薩摩藩が幕府の敵であることが明白となり、長州藩を助ける方針が固まった」ということだったと。すなわち龍馬が寺田屋で襲われた事件のせいで同盟交渉が「口約束」のようなあやふやなものではなくなり、幕府も諸藩も「長州と薩摩の深い関係」を明確に知ってしまい「薩長同盟があともどりできないものとなって良かった」と小松・西郷が「覚悟を決めた大笑い」であったと解釈します。これが「日本史の重大な転換点」であることをその時その三人はちゃんと分かっていたという意味です。

このように坂本龍馬の残した手紙を通じて知るのが龍馬の本当の姿であると考えます。

令和五年度 連続講演会 第三回

「幕府高官「京都所司代」再考」

上村　香乃（当館学芸員）

令和5年10月28日（土）13時30分～15時
於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

京都所司代とはどのような役職か。京都守護職との違いは何か。幕末期において所司代は、新規に台頭した勢力に圧されて目立たず、ゆえに捨象されがちである。しかしながら、所司代は幕府官僚制を構成するパズルのピースとして当然必要とされており、たとえば、天皇をお守りする「京都の守護」という役割の最高指揮官を担っていた。そこで本講演では、この「京都の守護」を媒介として所司代の役割を説明しつつ、文久二（一八六二）年に設置された京都守護職との連関について検討した。

近世における所司代は、関ケ原の戦いが起こった慶長五（一六〇〇）年に成立した役職であり、以後明治維新まで常置される。定員は一名であり、必ず譜代大名が就任した。幕府官僚機構上の所司代の立ち位置は、朝廷と江戸の役人の中間にあり、いわゆる朝幕の調整役として機能していた。所司代は当初から上方の支配に勤めていたが、その内情は少しややこしい。端的に述べるとすれば、初期は所司代を含む複数の役職が協力して上方の政治を担っていたが、一時権力が所司代に一局集中し、その後再び分権化されて最終的に所司代は上方の一部（大和・山城・近江・丹波国）を統括していく流れとなる。とはいえ、所司代は依然広域を支配していたのである。

さて、幕末期において、「京都の守護」は京都警衛として具体化される。京都警衛とは、外国の脅威から京都、とりわけ御所をお守りする軍事政策のことである。これは、嘉永六（一八五三）年六月のペリー来航をきっかけに朝廷と所司代の双方からの要請で開始された。体制化にあたり、所司代は初め、江戸での評議を求めたが、老中はこれを受けて所司代に諮問をすることで上方のあり方を尊重したため、所司代は京都の支配に係る役人による衆議を図った。この際、各役人から出された上申書は江戸へ届けられ、これを基に江戸での評議が行われていくのだが、取り急ぎの対応策として譜代大名の彦根藩による京都警衛が嘉永七（一八五四）年四月に決定する。なお、彦根藩が京都警衛のために差置く兵の人数や場所については所司代伺いとされ、ここに所司代の権限の詳細が垣間見えた。

この後、同年九月には大坂の天保山沖にロシア船のディアナ号が来航するが、この時点ではまだ江戸での評議に決着がついていなかった。しかしながら、即時の対応に迫られたため、結果として所司代は役人らの上申書を基に独自の判断で指図を行い、老中へは事後報告となった。

さて、ロシア船の来航を踏まえて十月には再度江戸で評議が行われた結果、江戸と上方の意見を踏まえて十一月には彦根藩をはじめとした京都周辺の譜代藩が任命され、警衛体制が拡大される。この中には、近世において御所の軍事的防衛を担っていた京都火消役もおり、警衛担当者の内訳は彦根藩、小浜藩、大和郡山藩、京都火消役であった。所司代はこれを指揮する立場にあり、彦根藩の時と同様に警衛の詳細については所司代伺いとされた。

京都警衛は、安政五（一八五八）年に日米修好通商条約の調印に伴って再拡大されるが、ここでは譜代藩の他に家紋・連枝と呼ばれる徳川家の親戚の大名も採用された。京都警衛を務めた藩の立場は同等ではなく、譜代の彦根藩を筆頭として序列が存在した。彦根藩の下には同じく譜代の小浜・郡山藩が、その下に家門・連枝の高松・松江・桑名藩が、さらに下には京都火消役が控え、これは警衛場所の重要度によって分けられた。たとえば、彦根藩は御所の外門を警衛したのに対し、家門・連枝の三藩は洛中洛外の境界とされた御土居の周辺を警衛している。当初から京都警衛を務めていた彦根藩は、警衛の拡大に際しても依然として最重要の立場に位置したのである。これを踏まえ、彦根藩と所司代の関係性に注目したい。

まず、所司代と各藩の一般的な関係性について説明する。既述のとおり、京都警衛の指揮権は所司代に委任されていたため、有事の際に各藩がまず伺いを立てる先は所司代である。その後、所司代は諮問機関である京都町奉行に意見を尋ね、最終的に所司代が統括した上で各藩へ結果が伝えられる決まりであった。次に、彦根藩の場合であるが、当然同藩も先述の規定ルートを踏む必要があった。しかしながら、同藩が近世初期より担っていた京都守護の家格が藩内での混乱を招き、結果として所司代を飛び越えて老中を介入させ問題の解決を図ろうとする。具体的には、兵の人数の決定を老中に要求したり、支配域の問題について老中首座に直接嘆願したりしており、このような行動に所司代は手を焼いていたと考えられる。

この関係性は、彦根藩主の井伊直弼が大老に就任したことにより、京都警衛においては所司代の指揮下におかれながらも幕府の役職上は所司代の上に位置するという矛盾関係が生じたことで悪化する。その中で、大老就任後に起こった問題の一つが、御所九門の警衛配備に関するものであった。より重要な門を守りたいことから警衛する門を変更してほしいと彦根藩が要求し、これは私情が絡んでいたことから当然受け入れがたいことであると思われたが、結果として所司代はこれを承知したのである。このように、大老に就任した彦根藩は京都警衛についても自らの意見を通すようになっており、所司代の指揮権限はかなり脅かされていたのであった。

しかしながら、桜田門外の変で大老の井伊直弼が暗殺されたことにより、幕府の権威が失墜するとともに京都警衛の筆頭も消失してしまう。これにより京都警衛において彦根藩の代わりが必要となったが、当時所司代でもあり京都警衛も担っていた小浜藩がこの代わりを務めることは不可能であった。理由としては、小浜藩は彦根藩程の石高を持ち合わせていなかったため財政負担能力が低く、かつ、既述のとおり所司代の指揮権はすでに弱体化していたことが挙げられる。こうした中で薩摩藩をはじめとする外様大名が強烈な割り込みをみせたのだが、幕府側は何とか権威を保とうとし、結果として出た案が会津藩の松平容保を所司代に据えかえるものであった。会津藩は彦根藩に匹敵する大藩であり、家門大名ではあったもののすでに安政五年の時点で京都警衛に家門が採用されているため、大した問題にはならなかったのである。ただし、会津藩が所司代は自分の役にふさわしくないとしたため、ここに京都守護職が誕生したのである。

このように、京都守護職の設置は幕府の組織的な問題からも検討することができ、そのキーワードは所司代が指揮権を委任されていた「京都の守護」であったのである。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（五十二）―

手荒い歓迎会

宮川 禎一

司馬遼太郎の小説『竜馬がゆく』一巻目。修業のために江戸に到着した坂本竜馬は土佐藩下屋敷で起居することになるが、新人歓迎会で先に江戸に来ていた土佐藩士らによって布団蒸しにされかけた。しかしそれを竜馬はするりと抜け出して、布団に巻かれたのは大先輩の武市半平太の方であった、というギャグ漫画のような場面がある。

もちろん史実ではなくて司馬の創作なのだが、古いアメリカ映画を観ていたらよく似たシーンが目にとまった。一九三八年の『ロビンフッドの冒険』という古典的名画だ（昨年ここに『恋と剣戟』というコラムを書きました）。映画前半の宴会場での乱闘シーンで主人公のロビンフッドは大勢の敵方に取り囲まれて危うく捕らえられそうになったのかと思えば、混乱の中で敵の親玉の方が自分の手下どもに絞められていたのだ。ロビンフッドはとっとと囲みを抜け出していたという面白い場面だ。

司馬先生がこの映画を観ていた可能性を考えていたが、『司馬遼太郎の日本史探訪』（角川文庫、平成十一年）という本にその気配が書いてあった。司馬遼太郎が楠木正成とロビンフッドの類似性を語る部分だ。

「イギリスのおとぎ話に、ロビンフッドというのがありますね。ロビンフッドというのは森の英雄で木樵の大将です。時の王様を助けて、王権の復興に尽くす山賊の親方みたいなものですね。楠木正成っていうのは、そのロビンフッドに相当するんじゃないでしょうか」

面白い比較だ。司馬先生はロビンフッドのことを書物から知ったのではなく、やはり「あの映画」を観ていたのだと思われる。それを小説に転用したようだ。また千葉佐那子のツンデレ設定もその映画のお姫様（マリアン妃）の影響かも知れない。

『竜馬がゆく』の前半部はこのような「時代小説」であり、研究者の出番は少ない。しかしやがて史実をベースとした「歴史小説」になってゆくのである。

坂本龍馬も参拝した神戸湊川の楠木正成墓碑
（1692 年に水戸黄門が建立）

『高知県立坂本龍馬記念館・

現代龍馬学会 論集 2022・2023 合併号』

を発行します

2022年度・2023年度開催大会の講演要旨・研究発表論文、および坂本龍馬記念館共催の企画展記念講演会の要旨（「飛騰」学会中刷より転載）、特別寄稿を収録しています

【目 次】

（2022 講演・研究発表要旨）

「龍馬脱藩への道」
龍谷大学特任講師・現代龍馬学会理事　髙山 嘉明

「坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと ― 龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？」
現代龍馬学会理事　今井 章博

「龍馬の時代の高知城下町～城下の風流「花台」を中心に～」
高知県立高知城歴史博物館副館長兼教育普及課長　横山 和弘

「龍馬と天皇と長州」
萩博物館特別学芸員　一坂 太郎

「海舟・龍馬の海防論の礎 ―伊勢国松阪の竹川竹斎と松浦武四郎」
松阪市松浦武四郎記念館館長　山本 命

（特別寄稿）

「薩長同盟における坂本龍馬の役割」
高知県立坂本龍馬記念館チーフ（学芸担当）三浦 夏樹

（2023 講演要旨）

「浦戸湾の歴史をたどる ―浦戸湾風景絵巻を中心に―」
高知県立高知城歴史博物館学芸課長　藤田 雅子

（2023 研究発表論文）

「海南政典の、ほぼ50年ウェーバーに先行した「官僚制」 ―その源流と吉田東洋の「思索」出発点―」
鹿児島県立短期大学名誉教授　吉田本家末裔　網屋 喜行

「いろは丸の急用」
現代龍馬学会副会長　徳島大学名誉教授　渋谷 雅之

A4版　65頁　令和6年5月末発行予定
販売予定金額500円

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

龍馬の手紙 22

ねこおいだき西のをく
のゑんニて、ひなたぼつ
こふ大口計へゝラ〳〵
さつしいり候

（坂本乙女・おやべ宛　慶応元（1865）年9月9日・京都国立博物館所蔵）

9月9日、重陽の節句に姉と姪にあてた長い手紙の一節です。現代語に訳すと、姪のおやべさんが「猫を抱いて西の奥の部屋の縁側で、ひなたぼっこをしながら、大きく口を開けてへらへら笑っている様子が浮かびます。」となり、龍馬が故郷を思い出しながら、ほっこり気分で書いている様子を想像します。おやべさんのことを「大口開けて、へらへらと…」と書き、「ちょっとひどい…」とも思いますが、仲がよいからこその軽口なのでしょう。（こういう物言いを全面的によいとは思いませんが…。）

この手紙には、他にも「私がいた茶の間の西の押し入れの書物箱にあった、確か焦げた色の表紙の小笠原流礼法の本を送ってください」（細かいことまでよく覚えている、と感心）とか「『新葉集』を京都で探しているが、見つからないから、写し書きして送ってほしい」とお願いしたり、後に妻となる楢崎龍を紹介したり、「家族の歌を書いた短冊の裏に両親の命日を書いてほしい」というようなことも書いており、なんとなく「素」の龍馬が見え隠れしているようです。

緊張の続く日々の合間に、家族あてに、こうしたちょっと力の抜けたような手紙を書くことを、龍馬は〝ご褒美〟のように楽しみにしていたのでは、と勝手に想像しています。そして、その手紙を、縁側で猫を抱きながら、楽しそうに読んでいる乙女さんやおやべさんの姿も勝手に想像しています。

日本の行く末を見据えて奔走する龍馬の姿がみえる手紙も魅力的ですが、それとはまた違う、家族や故郷を大切に思い、姪っ子を可愛がる…普通の青年としての龍馬の姿が垣間見える、こうした手紙にも魅力を感じるのです。

河村 章代

Q&A No.7

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

Q. シェイクハンド龍馬像は等身大ですか？
A. 等身よりやや大きい180cmです。

開館20周年の2011年11月、本館前にお目見えしたシェイクハンド龍馬像。「記念撮影のことや周りの環境を考慮に入れ、等身よりやや大きくして高さ180センチとした。」制作者のお一人が記されています。

坂本龍馬の身長は、親交のあった人物3人の明治期の証言と、遺された紋服の寸法から推測されるものとのこと。証言では、お三方それぞれ一寸刻みで微妙に異なり、5尺7寸（173cm）、5尺8寸（176cm）、5尺9寸（179cm）。紋服の大きさからは、身長170cmより少し高いくらい、となるようです。

何れにせよ170cmを超えており、平均的な身長が150cm台の当時の男性としては、なかなかの長身だった龍馬さん。外を歩けば道行く人々の目を引き、知り合いなら遠目にも「龍馬さんが行きゆう。」とわかったのではと想像します。

仰ぎ見る銅像ではなく、握手ができる、触れられる龍馬像。その前では、一人向かい合い、思い溢れる様子で見つめる方や、肩を組んだり、抱き着いたり、仲間同士のように大勢で囲んだりする光景も見られます。

親しみも敬意も様々に感じさせてくれる、ちょうどいい高さのブロンズ龍馬さん。差し出された右手は、数多の方々の熱い握手を受け止め、手の置かれる部分が金色に変化しています。

「握手」から今連想するのは平和と友好。人々が認め合い尊重し合う姿。シェイクハンド龍馬像の金色を帯びた右手を目にするたび、理不尽な暴力や争いのない平和な世界であるよう、強く願わずにはいられません。

手島 ゆか

学芸員の視点

『龍馬の名言』について

三浦 夏樹

当館へ寄せられる様々な質問の中で、比較的多いものが「龍馬の名言」に関する質問である。特に最近、「龍馬の名言」らしき言葉についての質問が相次いでいる。

最近問い合わせのあった言葉は次の三つ。

(1)俺は昨日の俺ならず

(2)人の世に道は一つということはない。道は百も千も万もある(2件)

(3)時勢に応じて自分を変革しろ

これらの言葉について、「本当に龍馬の言葉でしょうか」、「出典は何でしょうか」、という質問である。

残念ながらこの三つの言葉は、すべて龍馬の言葉ではない。そうなると、誰かが創作した言葉であるため、出典を調べることは容易なことではない。

私が「龍馬の名言」について質問を受け、龍馬の言葉ではないと判断した場合、まず想起するのは、司馬遼太郎著『竜馬がゆく』からの引用である。しかし、あらためて『竜馬がゆく』すべてを読み直す時間はないので、言葉の内容から考えて、どの場面の言葉かを連想し、調べていく。(1)の言葉のように手掛かりがない場合はお手上げであるが、(2)の言葉は武力倒幕と平和倒幕の話ではないかと想像できる。そうすれば、中岡慎太郎が登場する場面を調べてみる。結果としては、文春文庫版(全8巻)第7巻190ページの中岡慎太郎との場面で出てくる。

次に、(3)はおそらく檜垣清治と会って、「長刀→ピストル→万国公法」と龍馬の持ち物が変遷する時の話ではないかと想像できる。しかし、『竜馬がゆく』の檜垣が登場する場面で(3)の言葉は使われていない。そうなると次は、千頭清臣著『坂本龍馬』を調べてみる。大正3(1915)年発行の書物で、『竜馬がゆく』を初め、昭和以降の創作物の元となるような話が多数収録されている半分研究書、半分小説のような書物である。同書中、檜垣の話の最後に、「龍馬が時勢に適応するもの、概ね斯くの如し」と結ばれている。(3)の言葉は、おそらく、この言葉を現代の誰かが引用して手を加えたのではないだろうか。ちなみに、檜垣との話自体は創作だが、近い話が家族宛ての龍馬書簡に登場する。

その他、幕末維新期の平田国学者グループが作成したといわれる『英将秘訣』を調べることもある。

以上のように、「龍馬の名言」らしき言葉について質問があれば、『竜馬がゆく』・『坂本龍馬』・『英将秘訣』などを調べて、分からない場合は「不明です」と回答させていただいている。

10年ほど前、ある企業が「龍馬の名言」について調べたことがあった。当時、「Twitter」で1年間に書き込みのあった「龍馬の名言」をランキング化したもので、人気のある言葉は次の通りである。

①人の世に道は一つということはない。道は百も千も万もある

②世に生を得るは、事を成すにありを考えるほうの人間だ

③おれは落胆するよりも、次の策

④人間、好きな道によって世界を切り拓いていく

⑤世の人は我を何とも言わば言え我が成す事は我のみぞ知る

⑥日本を今一度洗濯致し申し候

⑦事は十中八九まで自らこれを行い残り一、二を他に譲りて功をなさむべし

⑧英雄とは、自分だけの道を歩く奴のことだ

⑨惚れずに物事ができるか

⑩事をなさんとすれば、智と勇と仁を蓄えねばならぬ

⑪おのおの、その志のままに生きよ

⑫時勢に応じて自分を変革しろ

⑬恥といふことを打ち捨てて世のことは成るべし

⑭時勢は利によって動くものだ。議論によっては動かぬ。

⑮世界の海援隊でもやりますかな

以上、5位と6位だけが龍馬の言葉で、他はすべて創作された言葉だった。実際の龍馬の言葉は長いものが多く、座右の銘などとしては案外使い勝手が悪い。それにしても、実際の龍馬の言葉が2つだけとは、かなり寂しい結果だった。

常設展示室出口付近にある龍馬の言葉

ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。
数ある商品の中から今回は、国産原料を使った木のぬくもり溢れるお役立ちグッズ３点をご紹介させていただきます。

「龍馬の鍋敷き」

お鍋やフライパンを使って熱々のお料理を作った際、ご自宅はもちろんアウトドアな食卓の場でも活躍する鍋敷き。

高知県産の木材を使用し、抗菌・抗カビ効果が高い素材の良さを活かしつつ、地球温暖化防止の為、カーボン・オフセット（二酸化炭素の排出量を削減し排出される温室効果ガス排出量を埋め合わせる取組み）商品なのが特徴です。

ヒノキや桜を交互に組み合わせ、木の素材ならではの優しい香りや温かさを感じるこちらの商品は、お鍋の大きさに合わせて形を変えることができ、様々なシーンで便利にご利用頂けるキッチンアイテムです。

またワンポイントである龍馬の焼き印も印象的で、プレゼントとしていただいても嬉しい商品ではないでしょうか。

価格1,650円（税込）

価格1,320円（税込）

「龍馬の洗濯板」

明治時代西洋から日本に伝わった洗濯板は、大正時代から広く使われるようになったとも言われています。部分洗いが出来るので、頑固な汚れも落としやすくなるというメリットがあります。洗濯機で一度洗っただけでは落ちないところをカーブ部分に押し当て、こすり洗いをする事で手洗いよりも効率よく短縮できます。そのため生地も傷みにくいでしょう。こぶりで、マスク洗いに適した大きさとなっております。

「マグネット・コースターセット」

こちらのコースターは、ひとつで二役の機能を持ったお役立ちグッズ！

天然素材の四万十ヒノキを使い、細かな細工を駆使した見た目にも美しい一品です。

中ほどの六角形3つをくり抜くと、それぞれに龍馬・坂本家の家紋・桂浜の焼き印がついたマグネットになっており、冷蔵庫など磁石の使える場所で便利にご利用頂けます。

価格1,080円（税込）

こんな龍馬グッズで生活を豊かにするお手伝いが出来れば嬉しい限りです！
この他にもまだまだ色々な商品を取り揃えておりますが、今後価格の変動や数に限りのある商品もございます。ご来館の際にはぜひ手に取ってご覧ください。

西川 知佐

海の見える・ぎゃらりい

■「海の見える・ぎゃらりい」

本館の「海のみえる・ぎゃらりい」ではその名のとおり、太平洋を眺めることができます。

向かって左が室戸岬、右が足摺岬の方角になります。長い長い海岸線から、高知県が東西に長い県であることを実感できるでしょう。広い海には、行き交うタンカーや漁船、週末にはヨットが見えることもあります。左方の港には停泊中のクルーズ船が見えることもあり、その大きさに驚きます。数年前には、事故のため一時寄港した潜水艦も見えました。

また、空を眺めると、高知空港を離着陸する飛行機や、たまにですが、ハンググライダーが空を横切るときもあります。（なお、これらの光景は屋上からのほうが、さらによく見えます。）

しかし、そこから見えるのは、海や空だけではなく、実は、色々なものが目に入ります。

右下を眺めると、地面に彩られた“くじらの親子”が見えます。これは、上空からでないと、なかなか気づかないかと思います。

左の方に目を向けると、木々の間に白く丸い灯台の頭がちょこんと見えます。高知灯台です。1883（明治16）年6月に高知県で初めて設置・点灯された灯台で、高さは約15m、約36キロ先まで明かりが届くそうです。昨年末には広場や展望台が整備され、桂浜の新たな観光スポットになりました。雨や曇りの日の夕刻や冬場など日没が早い時期には、オレンジ色のやわらかな光を眺めることもできます。

地面に泳ぐ、くじらの親子

写真右端、木々から頭をだしている白い灯台

そのほかにも、外階段の手すりにとまるトビが見えることもあります。そのことについて紹介した当館Facebookの文をご紹介します。

「（前略）本館外の東側には非常階段が付いており、本館内部の２階と中２階に繋がっています。（中略）誰も使うことがないので、この非常階段の最上段の手すりは、野生のトビのお気に入りの場所になっています。

本館のガラスは、完全なものではありませんがハーフミラーのようになっており、外からは中がよく見えません。トビは必ずガラスに向かってとまっているので、自分の姿を見るのが好きなようです。警戒心が強く目も良いため、外から近づくとすぐに飛び立ちますが、中からは１mくらいの距離に近づいても気付かれません。よく晴れた日で外が明るければ鏡の効果が高まりますので、より一層トビからは気付かれにくくなります。「ピーヒョロロ」と気持ち良さそうに鳴くこともあります。

午前中は日なた、午後は日陰になる場所なので、夏場の今は午後になってからとまっていることが多いようです。本館の中２階から見えますので、見つけた時は静かに近づいて観察してみてください。他ではあまり見ることのできない光景です。」（令和５年８月４日）

河村 章代

入 館 状 況

2024年3月20日現在

（1991年11月15日開館以来 32年127日）

◆入館者数 4,636,035人

■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来 699,275人

編集後記

温暖な高知は例年春の訪れが早いのですが、今年は暖冬のせいもあり、あっという間に冬が終わってしまいました。それはそれで少し味気ない気もします。

本年度最初の企画展は「龍馬記念館の蔵出し－学芸員セレクション－」展です。いつもと違い、龍馬や幕末といった歴史的なことがらから離れて、博物館としての坂本龍馬記念館をご紹介する展示です。表にはみえない博物館の裏側や、学芸員の仕事を知っていただく契機となればうれしいです。（か）

館だより“飛　騰”第129号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日 2024（令和6）年4月1日
発　行 公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください
開館時間 9:00～17:00　年中無休
入 館 料 一般 500円（企画展開催時 700円）
高校生以下無料
高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料

「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。
〒781-0262　高知市浦戸城山830　高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読 係 まで